精神薄弱兒の人格的適應に關する研究

(三) 人格構造、特に飽和、代償性の考察

大西憲明

一 問題の所在

既にわたくしは多年の臨床經驗及び文獻的考察によつて、精神薄弱兒の特質が知能水準の低劣のみならず、發達停止または遲滯、體質的缺陷、社會的自立困難をも含めた人格構造及び適應機制の全體的特質に依存することを指摘し、この解明のための問題諸領域を擧げてきた。(一九) そして、この人格構造の理解については、Lewin の力動理論に基く心的領域の分化度とその領域間の浸透性(交通度、融通性)の概念を、彼と門弟の實驗的考察、これに對する多くの批判實驗を照應させて論じ、特に硬さの概念規定についての曖昧さを考察してきた。(二〇) その際 Lewin の指導による Karsten の飽和實驗、Ovsiankina, Köpke らの一連の中斷作業の再行實驗、Kounin の共飽和實驗を中心に扱つてきたものの、これらの實驗結果をそのまま全面的に承認し、これから出發した精神薄弱兒の人格理論を無抵抗に肯定するにはまだ問題が殘されているように思われた。既に述べたように、Lewin は發達を心的構造及びそれを構成する心的素材の二つの因子で說明し、この二つの因子は分化度と硬さという概念に置き換えられるとし、これらの概念で發達を連續的、統合的に把捉しようとした。飽和、中斷作業の再行に見られた精神薄弱兒の特徵から導入されたこの硬さの概念も、人格の力動的體系としての構造の心的素材を代表する特質として對位された構成概念に他ならない。分化度はこの體系中における領域の數で表現され、硬さはその領域相互間の境界壁の特質、すなわちその機能的厚さの程度で示された。發達は分化度の增大と同時にこの硬さの增大を

もたらすが、この場合、分化度の増大に伴う經驗の場の構造化の促進は知的 mobility の増大を結果し、他方硬さの増大は反對にこの知的 mobility の減少をもたらし、これらの兩因子が變化しながら互にある程度相殺し合つて發達過程を特色づけるとした。これに對して Werner[五〇] は心的素材という元型的なものを採用せず、現象的には行動の variability の缺如、狀況の變化に當面して以前の行動樣式を固執するという行動的特性としての硬さを考え、これらの現象を說明する機能概念としては、分化度という概念のみを用い、この分化度の內容は心的諸機能間の交通度も含めた幅の廣い概念とした。この點については既に述べたとおりである。しかし、Werner も Lewin 一派の實驗結果には疑念を抱かず、ただ、その理論構成に對して批判を加えたことも前に觸れた。そこで、わたくしは Lewin 一派の精神薄弱兒の人格理論の基底をなすところの心的飽和や中斷作業の再行と代償性についての實驗條件や結果について、これら以外に試みられた諸檢討の文獻的研究、わたくし自身の臨床的實驗も含めて考察し、この問題の妥當性を一そう吟味しようとした。

二　心的飽和

（一）Karsten[一七] の場合はCA八―一一歲でMAの異なる正常兒と精薄兒を用いて比較研究し、飽和時間（月の顏と自由畫の描畫時間を含めたもの）に於ては大差なく、このうち精薄兒は月の顏の描畫で滿足し自由畫の描寫を拒絕した。すなわち、月の顏の描畫という單調な同一作業に對する固執性は推量されたが、その作業中には休止、その他の副次動作が著しく介在していた。ともかく、MAが劣る精薄兒は同一CAであつても一つの領域で飽和すると他の領域の活動に及ばなかつた。しかし、ここでは介在動作の頻出が問題になるがこの點の吟味はあまりされていない。正常兒が作業に眞劍に打込んでいたのに反し精薄兒が髮を引張つたり、よそ見したり、手をいじくつたりする時間をもつたところにかれらに特有の心的飽和についての種々の問題が伏在する筈である。Kounin[一五] の場合はCAが異なりMAの等しい被驗者を選んだ。このうち、正常兒に比較して精薄兒は共飽和度が小さく、したがつて一つの作業に飽和すれば他の作業にも共飽和することが乏しく、そこに人格構造の各領域相互間の機能的連關性の乏しさを予想させた。だが、この Kounin の實驗に對しては果してこれが飽和として見られるかという問題が起る。Werner[五〇] もこれは單調な作業に對する

精薄兒の一般的態度や傾向として認められるものであるとし、Goldstein[一〇] もこのような飽和實驗から硬さの概念を導きだすのは問題であり、硬さは一種の破局狀態に對する防衛反應であつて個人の特質（能力、態度）と作業の特質との關連に於て理解されるものとして反論した。以上の Karsten と Kounin の實驗條件の差異とその結果の理論的展開については Werner の質問に對する應答として Kounin[一一] がかつて一編を公開したものを引用して觸れたが、これだけではまだ明確にされているとはいえない。

（二）いずれにしても心的飽和と名づけられる現象は事實成起するだろうか。Karsten[一二] の最初の實驗においても、被驗者に紙に短い線をいつまでも書かせたり、簡單な模樣を反復して書かせたり、同じ短詩を繰返し反誦させると、この單調な作業に飽いて、所與の課題に抵觸しない範圍内で種々の變化を求め、例えば線の長さや太さを變え、始めは左から書いていたのを次の行では右から書くとか、途中から早く書くなどの態度の變容がそこに導入された。この變容は果しない足踏みの場からの逃避のための一つの手段のようであつた。その後は描線が混亂し、讀む詩の句讀や意味が連發しなくなつても平氣でいたり、遂に感情的爆發を起し、作業を中絶するものも出た。このような作業狀況の轉換に對する要求が心的飽和の特徴と考えられたのは、一定の作業に飽和した後に別な作業を與えたとき、これを續行したことから理解できた。このうち描く作業ならもうこれ以上は嫌だという狀態を Karsten は共飽和と名づけた。心的飽和は作業が何らの結末に達しない足踏み狀況としてみられるから、どれ位できるかのテストであることを告げると飽和が遲く、また、失業者を雇つて被驗者にすると何らの成績惡化の兆がなく持續された。また、被驗者に興味ある作業と無關心な作業について比較したときは前者に飽和の起る時期が早く出た。そこで、課題作業の性質としての快（angenehm）と不快（ungenehm）と飽和度（Sättigungsgeschwindigkeit）との關連から他の條件が等しい場合、快な作業は不快な作業と共に中性的作業よりも早く飽和すると法則づけた。矢田部達郎[五二] はこの點を深く自我の核心に觸れれば觸れるほど心的飽和は起りやすいと Lewin と同樣に說明した。

この Karsten のいう課題作業の快、不快は、被驗者である大學生に各實驗前に課題を見せてその時の印象で判別させたものであつて、それだけ、作業前の課題に對す

る態度に關するものであつても、飽和にとつて重要な規定要因となる作業過程における課題に對する快、不快、中性の感情的態度の評價ではないかもしれない。しかも、用いられた課題作業の殆どが手先の動作であつて、大學生にとつてはいわばかれらの自我の中樞面に觸れるような眞劍な事態を誘起するものであつたとはいえないかもしれない。また、この實驗報告からは被驗者の課題に對する評價、飽和時間の個人差があまり重視されず一般傾向として集約された感じもする。したがつて、所謂task-orientation と ego-orientation という態度による區別、同一個人の同一課題の快、不快、中性の場合の差異、作業過程中の課題評價の變化を含めた實驗による飽和現象の主要規定要因の探究が必要であるように思われる。この點を三浦[六]は興味の程度の問題から檢討するため幼稚園兒（CA約六歳）を對象にし、算盤、抹消檢査、自由畫、知慧の輪、コリント・ゲームなどを用いて試みた。結局、發展性の乏しい課題は興味のあるときの方が變容の現われ方が遲く、しかも早く作業を放棄し、發展性の多い課題では興味のあるときの方が變容が早く現われ、飽きも現われるが、よく粘るので、全作業時間が長くなつた。このように課題のもつ發展性と興味の程度に規定されることはあるが、やはりKarstenのいう飽和の法則が見られた。これからすると年少兒で、しかも比較的に知的な性格をもち、興味を種々に與える課題、さらに作業中に多樣な方向に開發させる發展性ある課題構造でも、Karstenの實驗結果に類似した過程をたどることが予想でき、一應は心的飽和の事實は承認できたといえよう。Karstenはこの飽和は前述のように心理的には現實の反復、すなわち進歩と反對の同じ位置に足踏みするところから起り、(1)小さな變容（variation）、(2)大きな變容、(3)比較的に大きい單位の動作が比較的に小さい部分に崩壞し、意味を失い、(4)誤り、物忘れの頻出、(5)疲勞に似た身體的症候の現出という順序で飽和過程が起ると報告したが、前記の三浦の實驗、松村[七]の實驗、その他の實驗及びわたくしが試みた場合にもほぼこのような現象が認められた。Freund[七]が試みたときも同樣であり、とくに月經中にはその特殊な身體的條件の作用のためか綿密な課題の飽和速度が容易な課題に較べて大きかつた。この綿密な作業が被驗者の自我の中核に觸れる眞劍な事態のためであるかもしれない。ともかく、Lewin[八]は飽和度は周邊的附隨的に行われずに自我に身近かな層で行われるほど增大する。このため周邊的な態度で行動すれば飽和

を回避できるという意味のことを述べている。この點は前述の課題のもつ快、不快、中性的性格とある程度對應するものとしても理解できよう。

Karsten は前述のように最初の實驗[一三]では大學生を用いてこの飽和現象から人格の層構造を解明したが、後の Lewin の指導による精薄者の人格構造の研究[一七]では兒童を扱つた。この場合は正常兒との比較が中心であつたが、行動の變化、作業態度の變容、感情的變化については大略大學生の場合に類似していた。ただ、兒童は分化度が成人に較べて低いため、その人格全體で行動するから[五一]一そう早く飽和するだろうと予想されるが、この Wolf の實驗ではまだ確實ではない。わたくしの場合でも年齢差、個人差、條件差に應じる明瞭な結果が出なかつた。Shacter が三、四、五歳の幼兒について實驗したときは、[五六]この年齢間隔は極めて少ないが年齢差はなく一様に簡單な作業よりも複雑な作業の方に飽和時間が長かつた。また、六歳の幼兒について賞讃及び競爭を含む眞劍な事態と何らの誘因を伴わない自然な事態における飽和について比較檢討した Wolf[五一]の研究では、かれらの個人的な目標如何が第一に重要性をもち、飽和時間はそのための障碍を克服する持久性の程度に依存するところが大きかつた。Seashore と Bavelas[四三]が試みたときは Karsten が成人について見出したものと同様の徴候を幼兒にも認めることができたが、この場合は、年齢差よりかれらの要求とその實現活動との間に密接な關係があるのを發見した。以上の點からは Kounin[一五]の場合のように飽和の速度がCAと共に低下するとはいえないようである。ゆえに年齢差という大きな規定要因をそれだけ抽象して、その働きのみを直ちに論じることは問題であり、前述の諸實驗の結果が示すように、課題の構造の簡單—複雑さ、それの與える快、不快、中性的感情效果、興味性の程度、課題の發展性、作業態度、とくに要求の種類と強度、目標設定の仕方、持久性などの諸要因の作用を含めた全體的事態の力學の檢討が必要になろう。わたくしの實驗でも、飽和時間はその事態の極めて微妙な影響によつても動搖し、特に作業の教示の仕方、課題の特質、被驗者と實驗者との相互交渉の仕方によつても多様な差異を見せた。そのうち、CA八—一五歳の精薄兒については、複雑な構造をもつ課題作業が容易な作業よりも飽和させやすく、實驗の前に各種の課題を並べて置いて「どれが面白そうか」と評定させ、この興味の順位とその實際作業による飽和時間との相關を算出したが、ここではあまり

關係がなく、むしろ個人差が大きく見られた。中には平常親しくしていた精薄兒は嫌になると直に作業を放棄したが、初めて用いた精薄兒は默々と從事し、中には月の顏を四時間連續して描き、これを打切ると次には自由畫を一時間描くものもいた。このように個人差の大きさは事態の諸要因に依るが、一般的には Lewin の場合と同樣に正常兒の方が着實に課題に對する執意を示す態度をとつた。

また、共飽和については Mc Andrew[二七] が Kounin の方法を用いて試みたとき、正常兒より聾、盲兒が共飽和度が小さく、中村[二八]が行つた場合も、共飽和度は聾兒が小さかつた。この聾、盲兒が Kounin の扱つた精薄兒の場合と何故共通な徵候を示すかは人格構造の分化度のみで簡單に割切れないものがあろう。柳川[五三]がCA三―一五歲兒について試みたときは、正常兒よりも精薄兒が飽和して作業を放棄した場合、新しく競爭場面に導入してもその作業の經續時間が短かく、設定された目標に向つてなされる意志活動が弱かつた。この點はわたくしも見出した。結局、飽和、共飽和と呼ばれる現象はどの實驗に於ても認められるが、正常兒と異つて精薄兒は Karsten も指摘したように、作業に對する持久力の缺乏、副次動作の頻出、一つの作業に滿足すると他の作業に容易に着手しないか、着手しても早く放棄しやすい傾向があるといえる。しかし、この傾向も既に述べたような諸要因に規定されて必ずしも一義的に起るとはいえない。

(ii) いずれにしても、Karsten[二三] はCAが等しくMAの異なる正常兒と精薄兒を用い、Kounin[二五] はCAが異なりMAの等しい正常兒と精薄兒を用いたが、ともに分化度如何は別にしても前者に比較して後者は一つの作業に飽和すれば他の作業に從事することが少なく、それぞれに對應する力動的人格構造の各領域間の獨立性、所謂領域相互間の硬い境界が機能的に予想され、行動的特性としては固執性と呼ばれる行動現象が認められた。この場合の硬さについては既に述べたように、Werner[四八〜五〇] は二つの領域間の topological な關係に基いて(1)安定的流動性（未分化的流動性、例えば幼兒に見られるもの）、(2)安定的流動性（事態への順應性）、(3)孤立化（isolation）に分け、固執的行動を惹き起すものはこの孤立化であつて、全體によく統合させていないためであるとし、この概念を廣い意味の分化度に含まれる機能概念として扱つた。わたくしも、この考えに同調し、飽和、共飽和、過飽和の現象の說明のために領域間の境界壁の硬さをもつてき、それ

によつて直ちにLewin, Kounin流の發達や精薄兒の人格構造の解明の理論にするには問題があることを指摘した。しかし、かれらの實驗結果は、そこに用いられた操作に卽したその條件内では信頼できるものを多分に認めることができた。

三　中斷動作の再行と代償性

(一)　Lewinの指導によるKöpkeの實驗[一七]はCA七—八歳の正常兒と精薄兒について中斷動作の再行(resumption)の問題を扱い、そこにあらゆる代償價(substitute value)を調べ、精薄兒には殆どそれが零に近いことを見出し、また、次第に主要動作(第一作業)と代償動作(第二作業)との活動の類似性を增大させても、ほぼ同樣なことを認めてきた。この實驗ではKöpkeはLissner,[一〇] Mahler[一一]の場合と同樣な方法を用いた。そしてOvsiankina[一二]と一致した結果を得た。この要求が滿足されない限り、目標領域の誘意性に對應する力が存續し、その目標または代償目標への到達によつて要求發生に相應する緊張體系が解消する假設は、中斷動作または未完了動作の再行(原作業への復歸)傾向、未完了動作の記憶的把持の面から立てられた。したがつて、Köpkeが得た精薄兒についての實驗結果も、それだけで直ちに精薄兒は代償作業の影響を受けず、したがつて力動的人格構造の各領域間の機能的交通度の硬さが予想できるであろうか。この代償性の規定要因も既に多くの研究によつて解明されているので、他の諸實驗と照應させながら考察を加え、この問題の一端を明らかにして行こう。

(二)　中斷された未完了の動作の完了への再行の問題を先ず實驗的に研究したOvsiankina[一二]によると、一定の方法で、ある動作を中斷させ、その後一定の自由時間を與えると屢々再行動作が見られた。この再行への要因として(1)作業の性質(連續作業に對してよりも一定の結末をもたらす作業の方が再行率が高い)、(2)中斷の時期(開始直後と結末直前が再行率が中間よりも高い)、(3)中斷作用の性質(別の作業を課して强制的に最初の作業を中斷したときよりも偶然による中斷のときの再行率が高い)、(4)中斷の期間(この中斷の時間の長短はあまり問題にならない)、(5)被驗者の態度(要求の强度、被驗者が中斷を命令と思い、義務を果そうとする從順な態度をとる場合は自我關與が少なく再行しない)、(6)年齡(九—一一歳の兒童も成人と同樣に再行した)、(7)未完了作業の存在(未完了作業が見えないところにある場合も再行傾向は減少しない)、(8)他人が未完了のまま放棄している作業が眼前

にあつても再行は必ずしも起らない。(9)結局被驗者の內面的目標が到達されない場合に再行傾向を招き、他の作業の挿入による中斷によつてこの作業が代償の役割をし、このために代償滿足が行われると停止することを明らかにした。この研究は再行が緊張狀態の殘存に關係することを示し、目標到達や代償動作によつて緊張體系が解消されることの證左に他ならない。ここでわたくしが問題にするのは Lewin[一七] が精薄兒を用いて試みた中斷作業の再行における代償性の解明であるが、かれらが代償性をどのように示すかという基底にはこの未完了動作の再行への傾向が先ず予想されていなければならない。完了への動機力が成立し、それに對應する緊張の持續と解消過程への傾向の特有性が明らかにされてこそ、かれらの特異な代償性に依存する人格構造の理論が確立されるからである。先ず Ovsiankina が檢討した再行傾向の規定要因のうち、年齡差は精薄兒について考察する際に必要であるが、この年齡差が無視できることは Ovsiankina の實驗のみならず、Katz[一四] も認めており、多少條件が異なるが Adler[一一] と Kounin[一二] もこれに近い結果を得た。しかし、Rosenzweig[一六] の場合はその實驗事態の特有要因の作用のためであろうか、必ずしも同一傾向を示さなかつた。次に知能の差も再行に有意な影響を與えないことを Katz[一四] が明らかにした。いずれにしても、兒童が示す要求の狀態と作業態度如何が再行傾向の決定要因であるようであつた。

わたくしが Ovsiankina の見出した再行率の高い要因、すなわち、結末をもつ積木の課題作業を與え、開始の直後に中斷し、偶然的と思われるような中斷方法を行い、被驗者と親和關係を構成して幼兒（CA四—五歲）三〇名を對象に實驗したときは大部分のものが再行を企てた。しかし、殘りのものはじつとしてわたくしの教示を待つていた。これと同じ條件下では精薄兒はさらに少數のもののみが再行を企てた。そこで、實驗者の何らかの社會的 stress の效果が予想されたため、被驗者のみを殘し自由活動が營まれるB事態と實驗者が被驗者の傍に坐しているA事態に分けて試みた。この結果はB事態が有意に再行し、九〇％を占めたのに對し、A事態では二〇％であつた。この場合は共に完全再行と不完全再行を含めている。次に中斷の方法を變化し、他の用事を命令すると、A事態、B事態共に一〇〇％再行し、實驗者の失敗のために中斷されたような仕組みをすると、A事態は五〇％、B事態は八〇％再行し、命令によつて禁止すると

A事態は一二%、B事態五〇%再行して、いずれも中斷された未完了動作の再行への傾向は、實驗者が傍にいたり、壓力を加えるときよりも、その場を離れ、かれらに自由活動の時間が與えられたときの方が强大であつた。したがつて、代償性の問題もこの所謂社會的壓力(social stress)を考慮する必要が感じられた。詫摩[四五]の場合も同樣であつた。精薄兒は前述のように正常兒に比較して再行への傾向が少ない場合は、課題作業の場に對する作業態度の確立が困難であるときのように見えた。この點もかれらの代償性の解明には重要であろう。だが、確立すると再行は强い。A、B兩事態における再行傾向の有意な差が見出されたことも一面にはこの作業態度の成立如何に依存するところが大きい。したがつて、精薄兒がどのような目標設定と課題意識を用意するかの要求、態度の問題を離れてはかれらの代償性による人格構造の理解を行うことができない。

(ii) 中斷された動作に對應する以上の緊張存續は、記憶的把持を通して察知されることも Lewin 一派によつて證明された。この把持の問題は代償性に直接關係するものとはいえないが、どのような作業態度をとることが把持と再生に有利であるかということを通して代償性規定要因の一面を明らかにすることができる。この完了・未完了作業の把持・再生に關する實驗を最初に行つた Zeigarnik[五五] は未完了作業の緊張の持續がその再生を有利に導いたが、これは中斷による情緒的衝擊や後に完了するよう命令されるかもしれないという期待の作用のためではなく、未完了のものを完了へと導く緊張體系の殘存壓力に依存することが予想された。その際兒童が成人よりも多く再生したのは、かれらが成人よりも作業に熱意をもつて關與したためであるとされた。これと對照的なのは注意散慢な兒童が低い Zeigarnik 指數を示したことである。このような態度の問題については、Marrow[三三]が競爭事態にし賞罰を加えると、この指數が上昇したことからも理解できる。また、被驗者が十分完成する前に中斷するよう教示すると指數は低下し、作業自體の終了よりも被驗者の設定した目標に到達したか否かという目標構造に規定されることからも判明する。この Zeigarnik[四一]の所見は Schtote, Sandvoss, Pachauri, Rosenzweig[四二] によつてそれぞれの立場から立證された。とくに、臨床心理學の立場からではあるが、記憶における repression 現象と結びつけて最近は活潑に研究されている。このうち Rosenzweig の一連の研究[三六―三九]は repression の起るような

事態では、この未完了作業の有利な再生が反對になり、未完了卽失敗と認識される作業は抑壓されて完了作業の再生のみが見られるだろうという假設を立てた。すなわち教示によつて實驗事態を formal (stress) と informal (non-stress) とに分け、兩事態における完了・未完了作業の再生を比較したが、前者では Zeigarnik と反對の傾向を、後者では同樣な傾向を見出した。彼はこの結果から被驗者が課題作業に對して task-oriented か、ego-oriented のどの態度をとるかという中斷に對する個人の解釋如何に規定されるとした。前者の態度は作業そのものに關心をもつ need-persistive な反應であり、成功が重要な意義をもつたり、失敗が恥ずべきものと思われないような態度、作業が中斷されるとその動作に對する要求や緊張が存續するのに過ぎないが、後者の態度は egoistic な動機で作業する場合であり、中斷が失敗の意味をもたらす事態に置かれると ego-defensive な反應を生じ、中斷は完了に對する何らかの urge を惹起しないで却つて中斷によつて生じた self-esteem の損傷が動作の記憶に對して抑制の働きをする場合である。Lewis[一九] と Franklin も同樣な結果を證明した。例えば Rosenzweig の實驗の場合でも、中斷によつて失敗感情を起させたとき、未完了作業を多く再生した兒童よりも完了作業を一層多く再生した兒童は所謂自尊心が比較的に高いと評價されるものであつた。Lucas, Rusell[二〇] もこの問題を檢討しているが、Alper[一] はこの完了・未完了の作業の再生は無作爲選擇の被驗者には妥當しないで、完了作業を多く再生するものと、未完了作業を多く再生する人々の間に一致した人格差が存するだろうとし、人格要因を變數として同樣な實驗を試み、ある程度實證した。このことは人格に基底される態度の問題が暗示されるといえよう。ともかく、中斷の事態が問題になるが、Glixman[一一] は stress の增加につれて未完了作業の再生が減少することを檢證したが、彼が從來のこの方面の文獻を整理し、そこにかなりの不一致を見出した。Prentice[二四] も緊張が單なる課題作業に特殊に對應するのでなく全事態に關係し、單なる作業の完了よりもより一般的な目標に關係する事態の問題であり、その事態如何によつて中斷動作の再生が種々に規定されると批判した。

これらのことは實驗事態の構成に關係するが、stress[一一] の效果がその中で特に問題にされている。Glixman も Alper[一] の實驗を批判し、そこに用いられた stress の增加の基準は適切でなく、現狀では實驗者が用いた操作

のみに基いて檢討を試みるより他は仕方がないといい、Cartwright[五]も實驗技術に卽して stress, non-stress 事態を考えるべきだとした。それだけこの實驗操作が事態の構成にとつて重要視されなければならない役割をするが、多くの研究では教示、作業の性格、社會的賞讃と非難、競爭などを用いて一應の stress 事態を設定して研究している。したがつて、前述のように stress 事態では被驗者が ego-oriented な態度をもち、non-stress 事態では task-oriented な態度をもつといつても、その實驗者の構成のままに肯定できるかどうかは問題であつて、そのため、中斷事態、再生傾向を不用意に比較するところに種々の無理が生じてくる。横山[五四]が stress (formal=ego-oriented situation) 事態としては知能檢査を用い、中斷されて未完了になつた作業は失敗課題として自我に脅威を與えるものとし、non-stress (informal=task-oriented situation) 事態としては中斷が實驗者の手順の失敗とか、課題の不適當と認められるものとし、この兩事態について比較檢討したが、その結果は中斷作業は必ずしも再生に有利とはいえず、課題着手から再生までの時間經過、課題を行つた場の雰圍氣如何によつても變動し、系列內の全作業の中斷と二分一中斷、二分一完了とは量的質的に異つた事態を構成していた。なお stress 事態では作業直後よりも一日後の再生が優れていた。この結果から stress 如何と呼ばれる事態も重要であるが、實驗操作に對するその際の被驗者自身がどのような態度をとつているか、卽ち中斷をいかに解釋してうけとるかの吟味が必要になつた。

伊藤[二]も從來の研究を檢討し、stress, non-stress 兩事態における作業の成功・失敗が完了・未完了作業の再生に及ぼす效果を調べたが、前者では一貫して成功作業が有意な再生を結果したが、完了作業の再生よりも、未完了作業の再生の變動が著しく、完了作業を成功或は失敗とするよりも未完了作業を成功或は失敗とする方が重要であつて、この被驗者の中斷に對する解釋如何に再生が依存していた。一方 non-stress 事態では失敗作業が有意に再生され、中斷效果は失敗体驗と關連して考察される必要があつた。また、未完了作業より完了作業の再生に大きな變動があり、未完了作業を成功・或は失敗とするよりも完了作業を成功或は失敗とする方が一層重要な契機をなし、その再生如何は完了に對する解釋如何に依存していた。兩事態で共通にいえることは失敗作業の再生減少よりも成功作業の再生增加であつた。結局記憶とし

て把持される作業は被驗者がその中斷を成功または失敗と感じるその感じ方、すなわち實驗事態をどのような態度で解釋するかに規定されるといえよう。以上の問題の檢討は直接には精薄兒に見られる代償性に關係しないが、中斷される事態の諸問題、とくにその事態の構造と態度の役割をこの面からも一應考察することができるので、次の代償性を檢討する前段階として簡單に觸れてきたのに過ぎない。

（四）Ovsiankina[三一]の實驗でも不再行のものは他の作業が挿入され、この介在作業が代償的役割を演じるもののようであつた。この代償性についてはLewin一派によつて多角的に檢討されており、Lissner[三二]もOvsiankinaと同樣に行い、元の作業と代償作業の間の機能的類似度、代償活動のもつ困難度に規定されたといい、困難な作業には比較的に高い要求水準が對應するためその代償價が高くなつたとした。この元の作業に應ずる目標に到達することが妨害されると空想又は口答という非現實水準において代償滿足を招きやすい。Dembo[三三]の怒りの實驗はその一端を示したが、この場合は要求妨害によつて任意の代償目標を設定したものの何らの永續的代償價をもたなかつたし、代償價は必ずしも滿足價をもたないことも示した。Mahler[三四]も兒童を用いて言語的表現や思考のもつ代償價を研究し、口答で終了するよりも動作の代償價が高いことを見出した。しかし、計算作業では口答が高い代償價を示し、動作の場合と同樣に兒童の目標の到達如何に依存するようであつた。したがつて、思考課題作業には知的解決が決定的役割をするため言語も代償價をもち、實現課題作業には物質的對象を構成する過程が高い代償價を示した。この現實度の問題を實驗事態全體として扱い、眞劍な事態（高い現實水準）と遊戯の事態（非現實水準）における代償價をCA三―七歳兒を用いて檢討したのはSliosberg[三五]である。彼女は對象、事態の意味の可塑性が重要であり、玩具の動物は小石や木片よりも固定した意味をもつため代償されにくい。しかも代償として受容されるのは、元の對象のもつ意味の可塑性よりも代償とされる對象のもつ意味の可塑性に比較的大きく左右されることを見出した。すなわち、眞劍な事態より遊戯事態は社會的役割、兒童の位置、目標、對象の意味が一層可塑性をもち、力學的流動體をなしている以上、代償化され易いと考えた。この場合の代償物の意味の發見がどのように行われるかが重要な役割をすると思われるが、Adler[一]は七―一〇歳兒を用いて中斷後に中斷された

元の作業と物質的に同一の第二作業を與えて調べた。この場合、例えばメリーのための家を建てることはジョニーのための同一の家を建てることの代償にはならなかつた。この二種の作業の類似性は認めたが、七—八歳兒はこの誰の家という concrete attitude の故に代償價が少なかつた。一〇歳兒は家を建てること自體を中心とする categorical attitude によつて代償價を多くもつた。この認知態度の發達については具體的精神構造 (concrete-minded) に關する Gelb と Goldstein[九] の腦損傷患者、とくに失語症の事例、Werner[四八] の發達における客觀化と抽象化の研究、精神薄弱兒についての多くの思考作用の研究、Vigotsky[四七] の situational thought が abstract, conceptual thought に先行するという研究などを始めとして多い。Adler の場合は一〇歳兒にこの categorical situation が效果的になることが分つたが、しかしこの抽象的類似性を發見する能力が必ずしも代償價を形成するのに十分であるとはいえなく、具體的類似性の認知もある程度作用していた。したがつて Lewin[一八] は Lissner, Mahler, Adler の結果から元の動作に對する第二動作の代償價は一方の滿足が他方の滿足をもたらすという仕方で二つの根底に横たわる力動的要求體系間の交通に依存するが、この交通を可能ならしめるものの一部分として動作間の認知的類似性があるとした。この認知作用が Sliosberg のいう代償對象のもつ意味の可塑性に關係をもち、また、Lissner, Mahler のあげた代償性規定要因としての二つの課題作業間の機能的類似性の成立にもある程度關係すると思われる。

(五) 以上の代償性の研究は中斷された元の動作の不再行を前提としているが、不再行の場合はこの挿入作業の代償價のみで說明できるであろうか。Sliosberg の實驗でも、飽和されると再行が減少したが、わたくしが幼兒、精薄兒について彼女と同樣に試みたときも代償性のみで解決できない場合を見出した。この點 Nowlis[五七] は元の作業、第二作業の成功・失敗を統制する手續きで試みて中斷された元の作業の成功・失敗經驗は有意味な效果をもたないが、挿入される第二作業の成功が元の作業の再行を有利に導くことを發見した。これに類似しているが、Cartwright[五] も作業の興味に及ぼす中斷、完了、失敗の效果を調べ、中斷の際に抱いたその作業の成功、不成功の予想が當面作業の興味を增減するとした。Gebhard[八] もこれに類似した傾向を見出した。東[四] も中學女生徒を用い、Cartwright に類似した操作で實驗し、その結果、

被驗者が作業自體に素朴な興味をもち、その事態に他の壓力が存しなければ再行する傾向を示すが、その興味よりも、その作業に成功するか不成功であるかということに規定される事態、すなわちテストされている眞劍事態が壓力になる場合、その中斷作業の成功・不成功の見込が再行を規定すること、また、中斷作業と類似性をもたない挿入作業でも、興味の對象として中斷された作業よりも強力になると不再行を招き、この結果から直ちに代償性が論ぜられないこと、結局、事態がどんな要求の滿足を阻止し、その後の反應がその事態の性質、要求の種類、阻止の仕方にいかに規定されているかが問題であるとした。このように代償性や代償價を規定する要因は種々あつて單に元の作業と代償作業（挿入作業）との機能的類似度、困難度のみでは解決しない。かつ機能的類似度を左右する條件、困難度規定の要因もまた複雜である。Lewin の指導による Köpke の精薄兒についての實驗[二七]でも、七—九歳兒は大部分が代償作業を行つても元作業に復歸したが一二—一三歳兒では著しくこれが減少していた。したがつてCAの大きい精薄兒では相當程度に代償性が認められるところに認知、態度、事態の問題がある。[二八]隱岐はIQ五〇—八〇、CA三・五—一六・五歳の精薄兒を用いて Sliosberg に類似した事態で試み、作業間の機能的差異が大きくなるほど代償性が現れにくいが、年長ほどこの傾向が著しく、この類似・差異の認知の發達が代償價に關係することを見出した。これは前述の諸實驗と略同結果であるが、遊戯事態では正常兒ほど代償物を受容してこれを發展させないし、眞劍な事態でも正常兒に比較して代償價が低く、全體として正常兒が事態に適應するため代償物を積極的に受容して行こうとする態度よりは消極的であつた。しかしCA、IQの增加に伴いこの代償物を受容してその事態を發展的に再構造する程度は發達していた。わたくしも同じく Sliosberg の方法を追試したが、CA六—一二歳、IQ四〇—七〇の精薄兒でも大略この結果に類似していた。

結　語

精神薄弱兒の人格構造と適應を明らかにする一つの方法として、Lewin 一派の情意實驗を扱つた。彼のこの面の理論が全面的に承認されなくても、その研究の着意や構想、實驗の進め方には卓越したものを覺えたからである。Karsten の心的飽和についての實驗的觀察とその規定要因の解明も後の研究者によつてその妥當性がある

程度検證された。興味の程度、課題構造の複雑性、發展性、課題に對する關心と作業態度などが當該個人の人格構造のどのような領域に關連をもつかによつて飽和の速度、過程が支配されることが明らかにされた。このような飽和速度は年齢發達に依存するよりも、教示による課題意識の成立、目標設定とその實現の持久性、その事態の社會的壓力を含めた全體場面の構成に影響を受けていた。精神薄弱兒に見られた副次動作の頻出も、この作業態度の不安定性による課題意識の變動性、瞬間的緊張解消を求める逃避作用であると考えられた。Kounin のいう共飽和も未分化な人格構造によりよく見られ、これを直ちに心的領域間の硬さに還元して説明しなくても、未分化な發達段階における現前の課題に對する態度の特質として考えられる。Köpke の中斷動作の再行の問題も、緊張體系の解消過程に見られる傾向として認められるが、これを規定する要因も數多い研究によつて明らかにされ、單純に説明ができないことは指摘してきた。元の作業と代償作業との機能的類似度に依存するといつても、この類似度の認知、その根底に横たわると予想される力學的連關性の成立條件は多様であり、また、困難度の要因も課題に對應して成立するが、これもその作業場面の構成、その課題作業に對する態度、適應の仕方によつて種々に規定されるからである。このように、Lewin 一派の實驗から發展性ある足場が與えられるが、多くの文獻も示すように、精神薄弱兒の場合についてはもつと條件の統制による研究が期待されるであろう。

文獻

1. Adler, D. L. Types of similarity and the substitute value of activities at age levels. (Reported in Lewin, 1935)
2. Adler, D. L., and Kounin, J. Some factors operating at the moment of resumption of interrupted tasks. *J. Psychol.*, 1939, **7**, 355–367.
3. Alper, T. G. Memory for completed and incompleted task as a function of personality. *J. abn. soc. Psychol.*, 1946, **41**, 403–420.
4. 東安子　中斷作業の再行を規定する條件について、教育心研, 1954, 2, 162–168.
5. Cartwright, D. The effect of interruption, completion, and failure upon the attractiveness. *J. exp. Psychol.*, 1942, **31**, 1–16.
6. Dembo, T. Der Ärger als dynamisches Problem. *Psychol. Forsch.*, 1931, **15**, 1–144.
7. Freund, A. Psychische Sättigung in Menstruum und

Intermenstruum. *Psychol. Forsch.*, 1930, **13**, 198-217.

8. Gebhard, M. E. The effect of success and failure upon the attractiveness of activities as a function of experience, expectation, and need. *J. exp. Psychol.*, 1943, **32**, 1-16.

9. Gelb, A., und Goldstein, K. Über Ferbennamenamnesie nebst Bemerkungen über das Wesen der amnestischen Aphasie überhaupt und die Beziehung zwischen Sprache und dem Verhalten zur Umwelt. *Psychol. Forsch.*, 1924, **6**, 127-186.

10. Goldstein, K. Concerning rigidity. *Charac. & Persona.*, 1942-1943, **11**, 209-226.

11. Glixman, A. F. Recall of completed and incompleted activities under varying degree of stress. *J. exp. Psychol.*, 1949, **39**, 281-295.

12. 伊藤正美　成功失敗と完成未完成課題，心研，1957, 27, 259-269.

13. Karsten, A. Psychische Sättigung. *Psychol. Forsch.*, 1928, **10**, 142-154.

14. Katz, E. *Some factors affecting resumption of interrupted activities by pre-school children.* Inst. Child Welf. Monogr. Ser., No. 16, 1938. Univ. Minnesota Press.

15. Kounin, J. S. Experimental studies of rigidity. I, II, *Charac. & Persona.*, 1941, **9**, 251-282.

16. Kounin, J. S. The meaning of rigidity: a reply to Heinz Werner. *Psychol. Rev.*, 1948, **55**, 157-168.

17. Lewin, K. *A dynamic theory of personality: selected papers.* New York: McGraw-Hill, 1935.

18. Lewin, K. *Field theory in social science: selected theoretical papers.* (Ed) Cartwright, D., New York: Harper & Brothers, 1951.

19. Lewis, H. B., and Franklin, M. An experimental study of the role of the ego in work. *J. exp. Psychol.*, 1944, **34**. 195-215.

20. Lissner, K. Die Entspannung von Bedürfnissen durch Ersatzhandlungen, *Psychol. Forsch.*, 1933, **18**, 218-250.

21. Lucas, J. D. The interactive effect of anxiety, failure, and intra-serial duplication. *Amer. J. Psychol.*, 1952, **68**, 59-66.

22. Mahler, V. Ersatzhandlungen verschiedenen Realitätsgrades. *Psychol. Forsch.*, 1933, **18**, 26-89.

23. Marrow, A. J. Goal tension and recall. I, II, *J. gener. Psychol*, 1938, **19**, 3-35, 37-64.

24. 松村康平　飽和過程の一考察，心研，1942, 17, 38-73.

25. 三浦　武　人の構造に於ける硬さについて，心研，1950, 20, 62-66.

26. 三浦　武　飽和速度の實驗的一研究，人文學報（東京都立大學），1953, 10, 65-80.

27. McAndrew, H. Rigidity and isolation: a study of the deaf and the blind. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1948, **43**,

476-494.
28. 中村　秀　聾兒に關する研究，教育心研，1957, 4, 150-153.
29. 大西憲明　精神薄弱兒の人格的適應に關する研究(一)，人文研究（大阪市立大學），1957, 8, 1-27.
30. 大西憲明　精神薄弱兒の人格的適應に關する研究(二)，哲學論集（大谷大學），1958, 4, 14-34.
31. Ovsiankina, M. Die Wiederaufname von unterbrochener Handlungen. *Psychol. Forsch.*, 1928, 11, 302-379.
32. 隱岐忠彦　精神薄弱兒の代償行動，兒心と精神衞生，1952, 2の5, 13-17.
33. Pachauri, A. R. A study of Gestalt problems in completed and interrupted tasks. *Brit. J. Psychol.*, 1935, **25**, 447-457.
34. Prentice, W. C. H. Retroactive inhibition and the motivation of learning. *Amer. J. Psychol.*, 1943, **56**, 283-292.
35. Prentice, W. C. H. The interruption of task. *Psychol. Rev.*, 1944, 51, **6**, 329-340.
36. Rosenzweig, S. Preference in the repetition of successful and unsuccessful activities as a function of age and personality. *J. genet. Psychol.*, 1933, **42**, 423-441.
37. Rosenzweig, S. The preferential reptition of successful and unsuccessful activities. *Psychol. Bull.*, 1936, **33**, 793.
38. Rosenzweig, S. *The experimental study of repression.* In Exploration in personality, New York : Oxford Univ. Press, 1938.
39. Rosenzweig, S. An experimental study of "repression" with special reference to need-persistive and ego-defensive reactions to frustration. *J. exp. Psychol.*, 1943, **32**, 64-74.
40. Rusell, W. A. Retention of verbal meterial as a function of motivating instructions and experimentally-induced failure. *J. exp. Psychol.*, 1952, **43**, 207-216.
41. Sandvoss, H. Über die Beziehungen von Determination und Bewusstsein bei der Realisierung unerledigter Tätigkeiten. *Arch. f. d. ges. Psychol.*, 1933, **89**, 139-192.
42. Schlote, W. Über die Bevorzugung unvollendeter Handlungen. *Ztschr. f. Psychol.*, 1930, **117**, 1-72.
43. Seashore, H. E., and Bavelas, A. A study of frustration in children. *J. genet. Psychol.*, 1942, **61**, 279-314.
44. Sliosberg, S. Zur Dynamik des Ersates in Spiel-Ernstsituation. *Psychol. Forsch.*, 1934, **19**, 122-181.
45. 詫摩武俊　精神薄弱兒の再行動作，兒心と精神衞生，1951, 1の6, 16-22.
46. 植松　榮　要求水準と再行動作，教心研，1956, 3, 221-227.
47. Vigotsky, L. S. Thought in schizophrenia. *Ach. Neurol. & Psychiat.*, 1934, **31**, 1063-1077.
48. Werner, H. *Comparative psychology of mental de-*

velopment. New York : Harper & Brothers, 1940.

49. Werner, H. Perception of spatial relationships in mentally deficient children. *J.genet. Psychol.*, 1940, **57**, 93–100.

50. Werner, H. The concept of rigidity : a critical evaluation. *Psychol. Rev.*, 1946, **41**, 163–168.

51. Wolf, T. H. *The effect of praise and comptition on the persistent behavior of kindergarten children.* Inst. Child Welf. Monogr. Ser., 1938, No. 15, Univ. Minnesota press.

52. 矢田部達郎　心理學序說, 創元社, 1950, pp. 105–109.

53. 柳川光章　心的飽和に關する實驗(四), 心研特集號, 1954, 25, 17.

54. 横山雅臣・映子　完了・未完了動作の把持に對する stress の效果について, 教育心研, 1954, 2, 157–161.

55. Zeigarnik, B. Über das Behalten von erledigten und unerledigten Handlungen. *Psychol. Forsch.*, 1927, **9**, 1–85.

56. Shacter, H. S. A method for measuring the surtained attention of pre-school children. *J. genet. Psychol.*, 1933, **42**, 339–371.

57. Nowis, H. The influence of succes and failure on the resumption of an interrupted task. *J. exp. psychol.*, 1941, **28**, 1–15.

次號豫告

大谷學報　第三十八卷第二號

目次

一、唯識といふことについて ……宮貫原章信

一、クシャトラパの性格およびかれらの佛教歸依についての諸問題 ……佐々木教悟

一、フィヒテに於ける Tathandlung（事行）の問題 ……加藤隆生

一、「法然上人行狀繪圖」成立の事情について ……高橋正隆

一、百利口語に就いて ……潟岡孝昭